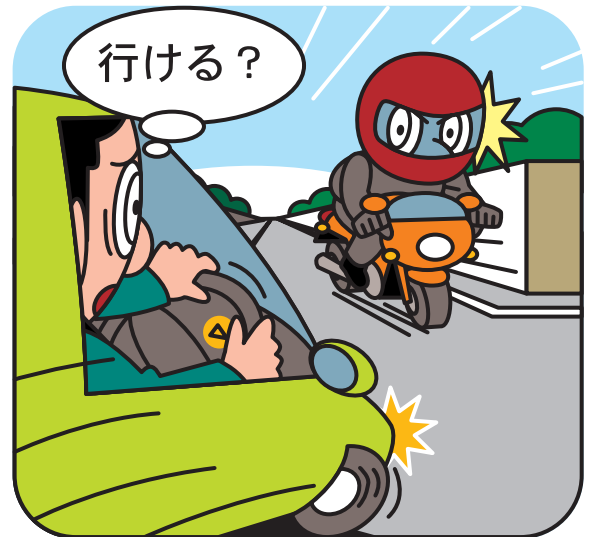


10月の安全運転のポイント 平成28年10月号

私たちは、いつも目の前にあるものを「正しく見ている」と感じています。そして、正しく見ているという前提で物事を判断しています。しかし、錯覚が起こると判断にも誤りが生じます。運転場面で起こる錯覚は交通事故につながる危険があります。そこで、どのような場面で錯覚が起こりやすいか、運転中の錯覚についてまとめてみました。

小さい車は大きい車より遠くに見える

同じ距離であっても、大きい車は近く見え、小さい車は遠くに見えます。乗用車などに比べて車体の小さな二輪車は、実際よりも遠くに感じやすく、右折時に二輪車が接近していても、まだ距離があり自車のほうが先に行けると誤った判断をすることがあります。二輪車が接近しているときは遠めに見えても通過を待ちましょう。



下りが上りに見える

長い下り坂を走行するとき、急な勾配が緩やかな勾配に変わると、上り坂に変わったかのような錯覚が起こることがあります。そうすると、実際は下り坂であるにもかかわらず、アクセルを踏み込んでしまい、スピードを出し過ぎる危険があります。坂道では、スピードメーターでスピードをチェックし、安全速度をキープしましょう。

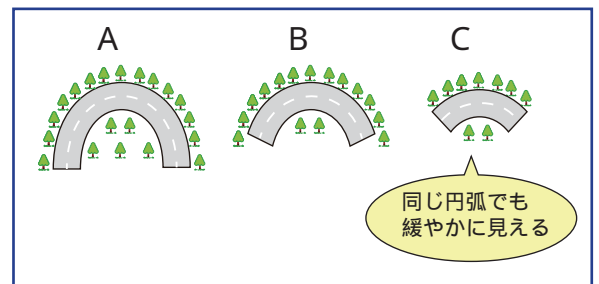


大型車に引き寄せられる

大型車の横を通過するとき大型車の大きなタイヤなどに視線が向いてしまうと、無意識に大型車のほうにハンドルを切ってしまい、あたかも大型車に吸い寄せられるような錯覚を起こすことがあります。見ているものに吸い寄せられる「視覚吸引作用」による現象です。このような事態を防ぐために、大型車を追抜くときや追越すときは、視線はまっすぐ前方を見て、大型車に視線を向けないようにしましょう。

カーブのきつさの判断を誤る

右図は、同じカーブを示したものですが、Cのようにカーブの先端部分だけ切り取ると、Aに比べて緩やかなカーブのように見えます。カーブのきつさを正しく判断することは意外と難しいのです。常に思ったよりカーブはきついかもかもしれないと考えて、手前で十分に減速しましょう。



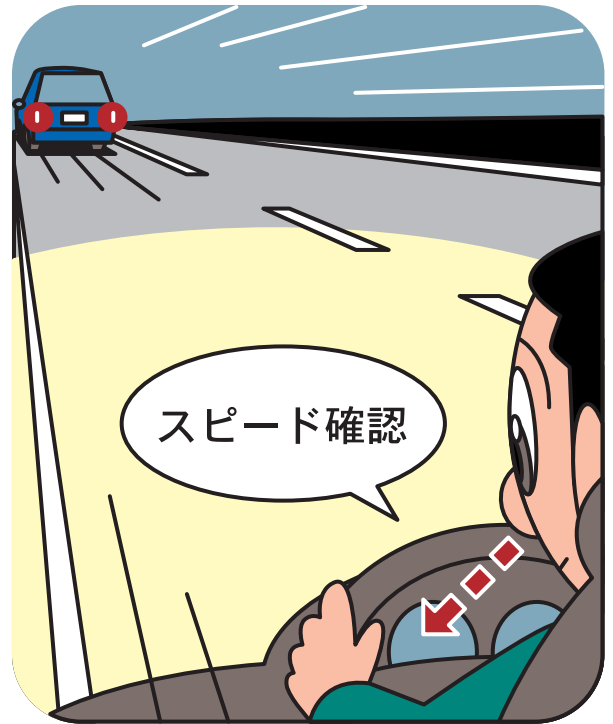
夜間に起こりやすい錯覚

夜間は視認性が低下するため錯覚も起こりやすくなります。夜間の錯覚には次のようなものがあります。

夜間は速度に対する感覚が鈍りがちで、実際よりも遅く感じてしまい、速度を出し過ぎることがあります。こまめにスピードメーターをチェックして速度をコントロールしましょう。

大型車は、テールランプの位置が乗用車より高いため実際より遠くに見えます。「まだ車間距離がある」と思って接近し過ぎることがありますから注意しましょう。

夜間、高速道路の左側車線を走行するとき、左のガードレールなどを見ながら走行していると、高速バスの停留所にさしかかったとき、停留所に誘導されてしまうことがあります。また、故障などにより路肩に停止している車を走行車と錯覚して接近し、追突してしまうことがあります。特に深夜や明け方などの意識が低下しているときに、このような錯覚が起こりやすいので注意しましょう。

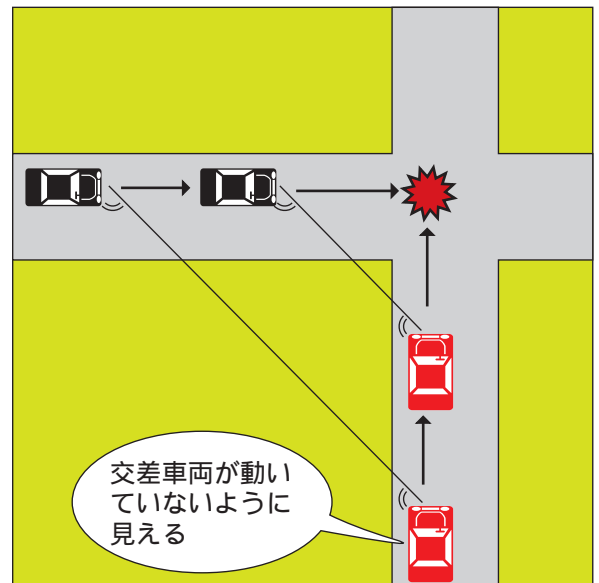


見通しのよい交差点で起こりやすい錯覚

信号機のない見通しのよい交差点では、次のような錯覚に注意しましょう。

道幅が同じ程度の交差点では、自車線のほうが広く見えます。そのため、自車のほうが優先だと判断して交差点に進入したときに、交差車両も同じように判断して交差点に進入してきて出会い頭事故を起こすことがあります。一時停止の標識や標示がある場合は一時停止をして交差車両を先に行かせなければなりません。そうでない場合でも、交差車両が接近しているときは徐行や一時停止をして交差車両を先に行かせるのが安全です。

常に同じ速度で接近する交差車両は視野の端にとどまって見えるため、動いている車だと気づかないことがあり、そのまま交差点に進入すると出会い頭事故を起こす危険があります。見通しのよい道路でも交差点に接近するときは、交差車両が近づいていないかを必ず目視で確認しましょう。



「ご相談・お申込先」